

ぱぱわびろーりんすとん

上水敬由

最近、クルマの中でたまに昔の曲を聴いている。

たとえば、テンプレート・ジョンズの『Papa was a rolling stone』だ。

1972年に発表された有名な曲なので、歌詞の内容をあらためて説明する野暮もないだろうとは思うのだが。

子供が母親に、まわりからへろくでなしだったと言われている父親のことを尋ねて、母親はただ、父親はへ転がる石だったとだけ答える。

その繰り返し。

背景に、北米の広大な荒野を果てしなく延びているハイウェイや、落書きだらけの煤けた街角にある古びたアパートなどをイメージすることもできる。

父親は「まともにも働いたことがなかった」、「よそに三人の子供と妻がいた」、「神様の名をかたって借金や盗みを重ねていた」、「酒と女に溺れていた」という。

へ転がる石は、明治の頃に英語から翻訳された「転石苔むさず」からの転用で、定着しない人間は成功がおぼつかないとする解釈と、柔軟な対応ができるので上手くいくだろうという解釈のふたつがあるのだそうだ。

この歌の場合は、前者の意味で使っているように見えるが、母親がそこまで考えているかどうか。

それはそうではなくて、かつてへ流れ者へを愛したという事実を、どこかで聞き知ったこの言葉で静かにかみしめている姿なのだろう。

男というものには、やはり、どこまでいってもへ流れ者へにすぎないところがある。

終末期の炭鉱地帯で幼少時を過ごした身としては、そもそも故郷などない根なし草みたいなので、へ流れ者への気持ちすがすこしはわかるような気がする。

今の場所に住まいを決めたのは、いくらかは、自分の子供にそれなりの「故郷」を用意してやりたいという勝手な思いがあつてのこと。

知人に誘われて土地の祭りに首を突っ込んだのも、自身に対する似たような考えからだ。

もつとも、当然といえば当然のことながら、どうしても付け焼き刃の匂いが抜けず、こちらの方は大して上手いかなかったと思う。

さらに思い直せば、子供についても、狙い通りにいったかといえば、怪しいものだ。

また、プロコル・ハルムの『A Whiter Shade of Pale』やローリング・ストーンズの『Gimme Shelter』なども聴いている。

前者は1967年、後者は1969年に発表された曲。

ただし、前者はともかく、後者で聴いているのは、2000年代に入ってから、『Playing for Change』の中で他のミュージシャンによって演奏されたものだ。

ふたつともベトナム戦争の時代に生まれた。

前者は『青い影』という邦題が付けられており、浮気を指摘された女が男の元を去るという内容だと、大方のところでは説明されている。

そういつた中に、歌詞として使われている語句などはほとんどが軍事用語（隠語）で、この曲は戦闘場面を表しているのだという面白い意見があった。

その妥当性はともかく、後者を含め、この時代の曲に死の影がまどわりついていることはたしかだろう。

当時を生きた人間として、*へレン*という語からロープシンの『青ざめた馬』を連想することは自然だ。

「死」を象徴する『ヨハネ黙示録』第6章第8節。

それは、クリント・イーストウッドの『ペイルライダー』にまでつながっている。

我が国の近くで戦争があつていて、頭の上を米軍機が普通に飛びかっていた頃。

ファントムが墜ちた夜のことを思うと、マツクイムシの

害から生き延びた、線路脇のヒヨロリとした松の姿が、炎とともに脳裏に浮かんでくる。

防空壕や地下壕が各地にかたちを変えて生きていた。

ついでに、国内の騒乱についても触れておこう。

まだ「革命」や「共産主義」といった言葉に、何らかの幻想を生む力があつた時代だったのだ。

自分はどうと、いわゆる学生運動から一定の距離を置く立場にいた。

生まれつき他人から支配されるのが嫌い、さまざまなキレイ事を並べている学生たちの集団も、内部は大なり小なりあからさまなヒエラルキーに縛られているのが、どうにも嫌だった。

といつても、彼らの純真を否定していたわけではなく、今でも、それを否定すべきではないと考えているが。

それとこれとは別の話ということ。

要は、マルクスやレーニンや毛沢東の顔を見て、こんな悪党面の連中の言うことを信用できると思う方がおかしいだろうと、そう思ったわけだ。

それはともかく、どういうわけかここまで死なずに来たので、とりあえずは、昔の曲でも聴きながら慎重運転に努めることにしよう。